

目次

はじめに —「させていただく」を多角的に眺めてわかったこと—	1
.....	椎名美智

第Ⅰ部

特別寄稿 「させていただく」は敬語体系の欠陥を補う	21
.....	飯間浩明
幻の講演を再現 敬語の歴史社会言語学 —関西起源のテイタダク—	37
コラム 標準語の鍾乳洞モデルとテイタダク	90
.....	井上史雄

第Ⅱ部

第1章 敬意漸減 —すり減って止まない敬意が引き起こすこと—	95
コラム 心優しい日本人？	116
.....	滝浦真人
第2章 テモラウの依頼用法 —テイタダク成立への契機—	121
コラム 琉球語には「～ていただく」形式がない！？	155
.....	荻野千砂子

第 3 章	漫才談話の結末句の機能と変遷	
	—「やめさしてもらわ」をめぐって—	159
	コラム 「これをあなたにもらってもらいましょう」	
	—「あげましょう」にあたる申し出表現—	193
	日高水穂
第 4 章	「させていただく」の地域差は、どういう地域差なのか	
	—世論調査と「食ベログ」調査にみる—	197
	コラム 似てるからって油断するなよ	
	—日本語「差し上げる」と韓国語「トッリダ」—	236
	塩田雄大
第 5 章	参与者追跡の観点から見た「させてもらう」の機能	
		239
	コラム うっせえ うっせえ うっせえわ 書かれているよりも健全です！	273
	山田敏弘
第 6 章	「させていただく」はなぜ一人勝ちしたか？	
	—ベネファクティブの変遷に見る敬意漸減プロセス—	277
	付録 『「させていただく」大研究』までの足跡	315
	滝浦真人・椎名美智
	コラム 「させていただく」のこれから —「美化語」を目指す敬語たち—	318
	コラム 「みなさまが～ていただく」？「みなさまに～ていただく」？	
	—助詞のシフトで、何が変わるのか？—	320
	椎名美智
	執筆者紹介	323
	あとがき	325

はじめに

——「させていただく」を多角的に眺めてわかったこと——

椎名美智

授受動詞には「やる・あげる・さしあげる」「もらう・いただく」「くれる・くださる」という3系列7動詞があり、本動詞としてだけでなく、他の動詞の後ろにつく補助動詞としても使われている。本書は、補助動詞として使われている授受動詞、特に「させていただく」に焦点を当てて、さまざまな分野の言語学者が各自の専門の視点から分析した論考を集めた論文集である。

言語学は決して一枚岩ではない。内部は多くの領域に分かれており、分野が異なると、専門用語はもちろんのこと、データ、分析方法、理論的背景、論じ方など、すべてが少しずつ異なっている。そのため、同一の事象を見ている、そこから導き出される主張は同じとは限らない。同時代の同事象でも、アプローチが異なれば全く異なる結論に至るし、時代が変わっても、同様の結論に至っている論文に出合うこともある。

本書の特徴は、普段なら同じプラットフォームで議論を交わすことのない異なる専門領域の言語学者たちが集結し、もっぱらモラウ系ベネファクティブ「させていただく」について論じた点にある。これほどバラエティに富んだ専門分野の研究者が一堂に会し、同一テーマを論じたことがこれまであっただろうか。執筆者の方々には、「させていただく」研究の決定版を目指した『「させていただく」大研究(仮)』への執筆を依頼した。今、その(仮)を取って、本書のタイトルとして掲げたい。(ただし、「させていただく」があまり使われていない時代や分野の分析を専門とする方には、「ていただく」を論じてもらっている。)

「させていただく」は敬語体系の欠陥を補う

飯間浩明

1 目の敵にされる表現

「(さ) せていただく」は、「(ら) れる」と同じく動詞の後につけて敬意を表す。『三省堂国語辞典』(以下『三国』)では、以前はこのことばを連語と捉えていたが、第8版(2022年)ではひとつの助動詞と認定した。「先生が本を読まれる」「先生がこちらに来られる」など、助動詞「(ら) れる」が尊敬語として使われるのに対し、「私が本を読ませていただく」「私がこちらに来させていただく」など、助動詞「(さ) せていただく」は謙譲語として使われる。他人の行為や状態を尊敬を込めて描写する「(ら) れる」と、自分の行為や状態を謙遜して描写する「(さ) せていただく」は、ともに動詞に敬意を添える主要な助動詞とみることができる。

ところが、日本語を話す人々から支持される度合いは、「(ら) れる」と「(さ) せていただく」(以下、基本的に「られる」「させていただく」で代表する)では大きく異なる。「先生が読まれる」「先生が来られる」など「られる」を使った表現は、ときに「敬意が軽い」「乱用すべきでない」などとは言われるものの、強い批判の対象にはならない。一方、「読ませていただく」「来させていただく」などの表現は、新聞の投書欄のみならず、いわゆる「間違った日本語」を扱う書物などの中で、「感心しない」「無用である」その他、あらゆる厳しい言い回しで論難される。

「させていただく」はいつから人々の目の敵にされ始めたのか。『三国』

敬語の歴史社会言語学

関西起源のテイタダク

井上史雄

(((ねらいと構成)))

本稿ではテイタダクを中心におき、方言学・社会言語学を出発点に、語用論や対照言語学の知見を取り入れて、関連課題を論じる¹。小から大へ、具体から抽象へ、事実から理論へと進む。

- (1) まずテイタダクを日本語の歴史と地理の中に位置づける。椎名(2021)で現状と理論がよくとらえられているので、基盤とする。また日高(2007)が方言分布をとらえる出発点になる。
- (2) 次に地域差をとらえる。テモラウとテイタダクの分布と歴史を見て、関西起源であることを地図で確認する。更に多様なデータを使用し、地図化・グラフ化して普及過程を詳しく論じる。聞き手を意識した方向性(求心性・遠心性)について、地理と歴史の対応が見られる。
- (3) 敬語の変化・変質として、敬語全体の丁寧語化、美化語化、民主化・平等化などの傾向と関係づける²。テイタダクが広がった理由として、日本語史における補助動詞の発達、語用論的に見た心理的距離やポライトネスの表示を見る³。さらに歴史社会言語学の中に位置づける。

キーワード ていただく 行く・来る 授受表現 方向性 敬語史 方言分布

- 1 先行研究の用語としては「(～)((さ)せ/し)ていただく」のカッコの付け方が多様であるが、書きことばとしての字数と話しことばとしての簡潔さを目指して、本稿ではテイタダクと記す。
- 2 敬語の変化としては、尊敬語「いらっしゃる」の変化(丁寧語化)も関係するが、本稿末尾4.7での簡潔な言及にとどめる(井上編2017)。
- 3 近年「ベネファクティブとポライトネス研究集会」などで盛んに論じられている。

第 1 章

敬意漸減

すり減って止まない敬意が引き起こすこと

滝浦真人

(((この章のねらい)))

本章では、日本語の呼称や敬語などの敬意が次第にすり減って使えなくなっていく「敬意漸減」の現象を概観する。それを独立した1章として立てるのは、敬語や授受動詞の全体に作用するこの現象の働きがそれらの変遷を解く鍵となっているからであり、さらには、本書のテーマである「させていただく」においても典型的に見られることだからである。

敬意漸減は戦前から知られていたが、呼称に関して論じたものが主だったことに加え、戦後の日本語研究では、そもそもあまり取り沙汰されることがなかった。そのため、具体的にどのような語や表現におけるどのような現象として表れてくるか、敬意漸減過程と個々の時点での状態との関係をどう考えるべきか、敬意漸減の速さに影響する要因には何があるか、身分社会と非身分社会とでどう異なるか、といった観点から具体的に論じた文献も、ごく少数の例外を除いて見られない。敬語的形式の史的変遷についての議論が適切になされていない事例も散見されることに鑑み、これを機会に敬意漸減についての包括的な解説を提供したい。

キーワード

敬語変化の動因・ベネファクティブの消長・敬意漸減の速さ・
敬意のインフレーション・この先の日本語

1 なぜ「敬意漸減」を？

歴史語用論的な視点から「させていただく」現象を考えるのに欠かせないのが、「敬意漸減（／敬意逡減／敬意低減¹）」の作用とその影響である。

1 用語として大きく「敬意漸減」と「敬意逡減／低減」があるが、どちらも“敬意が次第に（す

第2章

テモラウの依頼用法

テイタダク成立への契機

萩野千砂子

(((この章のねらい)))

現代語の授受動詞ヤル・クレル・モラウ・アゲル（サシアゲル）・クダサル・イタダクは、補助動詞テヤル・テクレル・テモラウ・テアゲル（テサシアゲル）・テクダサル・テイタダク（以下、テ+補助動詞の形式をテ形と呼ぶ）とともに体系を成す。テ形の中で、まずテクレルとテクダサルが中世期（室町時代）に出現した¹。その次にテマイラス・テシンズル（テヤルの敬語形）とテヤルが、中世末期から近世（江戸時代）初期にかけて出現した。その次に、テアゲルが、近世前期に出現した。こうして、テヤルとテクレルは非敬語形と敬語形が近世前期までに揃ったのに対し、テモラウの敬語形であるテイタダクは出現が遅く、近世後期になって出現している。

なぜ、テモラウの敬語形テイタダクは出現が遅かったのだろうか。実は、近世期はテモラウの使用数自体が少ない。近世語テモラウは、現代語テモラウと用法が異なっていたと考えられる。この章では、テモラウの用法が変化し、テイタダクが新たに必要となった要因について考察したい。

キーワード

テクレ・テモラオウ・テモライタイ・依頼の用法・18世紀後半・聞き手への配慮

1 テイタダクの成立に関する先行研究

近世前期の17世紀前半には、テクレル／テクダサル、テヤル／テマイ

- 1 テクレルとテクダサルの用法を見ると依頼の用法が多い。テクレルの依頼形は、テクレヨ>テクレイ>テクレと変化するが、本章ではテクレを代表形式とする。テクダサルの依頼形は、テクダサレヨ>テクダサレイ>テクダサレ>テクダサイと変化するが、本章ではテクダサイを代表形式とする。

第3章

漫才談話の結末句の機能と変遷

「やめさしてもらおうわ」をめぐって

日高水穂

(((この章のねらい)))

漫才には、「もうええわ」「ええかげんにせえ」といった定型的な締めフレーズ（結末句）があるが、これらと並んで使用される結末句に「やめさしてもらおうわ」がある。一方、古い漫才資料を見ると、ボケの一言（オチ）で終わっていて、ボケへのツッコミに相当する結末句が現れないものも多い。また、漫才談話の終わりの部分の展開を見ると、「もうええわ」「ええかげんにせえ」は単独で使用される例もあるが、「やめさしてもらおうわ」は何らかのツッコミフレーズが発されたあとに出てきており、これらの結末句はそれぞれ談話展開上の機能が異なると見られる。この章では、漫才の結末句の変遷を見るとともに、「やめさしてもらおうわ」を含む結末句の漫才談話における機能について考えたい。

キーワード

漫才談話・ボケとツッコミ・結末句・サセテモラウ形式・近畿方言・
『M-1 グランプリ』

1 はじめに

ボケ（愚役）とツッコミ（賢役）の掛け合いから成る漫才は、オチとなるボケの言動に対するツッコミの一言でネタが終了する場合が多い。漫才談話を終了させるツッコミフレーズを、ここでは「漫才談話の結末句」と呼ぶことにする。

漫才談話の結末句には定型化したものがあり、現在の中堅以下の漫才コンビでは、上方系（関西を拠点に活動しているコンビ（コンビ結成時に関

第4章

「させていただく」の地域差は、どういう地域差なのか

世論調査と「食ベログ」調査にみる

塩田雄大

(((この章のねらい)))

「させていただく」の発生・使用には地域差があることは、これまでも語られてきている。しかし、この地域差をめぐって、現代の「実態」を「客観的に」とらえようとする試みは、意外なほど少ない。本章では、NHK 調査・文化庁調査、そして「食ベログ」の書き込み内容を資料として、まずは手始めに関東（東京）と関西（大阪）での使用意識および使用実態を中心に、全国平均とどの程度の違いがあるのかを観察したうえで、分析をおこなってみる。

キーワード 東京・大阪・聞き手無関係型・迷惑性・実害

1 「させていただく」における運用上の問題

本章では、「させていただく」に関し、地域差という形で把握することができるとされる諸事象をめぐって考察を進めたい。

その前提として、まず「させていただく」という言い方自体には短く見積もっても100年以上の歴史があることを確認しておく¹。今泉（1943: 168）には、「させていただく」が「明治の中葉以後」に流行したものであることが示されている。また松本（2008: 359）は、「療治をさせて戴き

1 なお、「させてもらう」の実例については、陳（2017）で1771年の例「どうぞお前方のお心で、（その）髻様をちょっと拝ましてもらうたら」（浄瑠璃、妹背山婦女庭訓）（p. 39）が、また山口（2015）では1798年の例「春は伊勢参りもさしてもらふはへ」（洒落本、十界和尚話）（p. 2）、1812年の例「わたしハとらやのおまんやへよめ入さしてもらひますハへ」（噺本、臍の宿かへ）と1841年の例「時に三番を入さしてもらひませにや、どふもなりません」（噺本、落断千里敷）（p. 12）などが示されている。

第5章

参与者追跡の観点から見た「させてもらう」の機能

山田敏弘

(((この章のねらい)))

日本語では、他者と話をするとき、さまざまな名詞句を代名詞化せずに省略して話を進めることが多くある。しかし、なんでもかんでも省略して、それを「文脈」から理解しているというわけではない。日本語には、省略された名詞句を適切に回復させるための装置が多様に用いられているのである。

この章では、このような省略された名詞句の一部である談話参与者を、どのように回復し追跡していくかという参与者追跡の観点から、「てやる」「てくれる」「てもらう」といったベネファクティブの補助動詞群を考えていく。また、本書全体で考えられている「教えさせてもらう」「教えさせていただく」のような「させてもらう」「させていただく」のもつ機能についても、この参与者追跡の観点から再考を試みる。

キーワード 参与者追跡・主語・省略・方向性・ヴォイス

1 はじめに——「ベネファクティブ」という用語を用いる理由——

日本語学、また日本語教育の世界で、一般に「やりもらい」や「授受動詞」などと呼び慣わされる「やる」「くれる」「もらう」、および、その待遇的バリエーションである「あげる」「さしあげる」「くださる」「いただく」の7つの動詞のもつ補助動詞用法を、筆者は「ベネファクティブ」という用語で括って考察してきた。

新しい用語を用いるには、それだけの理由がなくてはならない。その理由については、次のように述べてきた。

第6章

「させていただく」はなぜ一人勝ちしたか？

ベネファクティブの変遷に見る敬意漸減プロセス

滝浦真人・椎名美智

(((この章のねらい)))

「させていただく」がこれほど使われていることには理由があるはずだ。以前使われていた形が「させていただく」によって取って代わられているとしたら、それは何であり、なぜそうしたシフトが生じたのか？ そのことを他のベネファクティブや敬語表現に探っていこう。それらの現象は、人々の敬語意識の変化を反映すると同時に、数百年にわたって「敬意漸減」過程が作用してきた結果でもある。日本語の特徴でもあるベネファクティブの3系列体系の歴史から、敬意漸減の痕跡をたどってみよう。その先には、「させていただく」のこれからの姿もおぼろげに見えてくるだろう。

キーワード

「させていただく」への流入・ベネファクティブと敬語・敬語意識の変化・敬意のインフレーション・ヤル系 vs. モラウ系

1 はじめに——「させていただく」へと流れ込んでいるもの——

本章の目的は、「させていただく」の使用拡大の背景を、歴史語用論的アプローチで探ることにある。筆者らのこれまでのベネファクティブ研究では、自分の行為について“あなたのために・あなたとの関連で・あなたを意識しつつ”丁寧に言うための様々な表現(「お／御～します」「(お／御)～いたします」「～てさしあげます」「～させてください」)が使いづらくなり、「～させていただく」へと流れ込んできている様子が見てとれた。「～させてくださる」からの交代もさることながら、特にヤル系動詞の凋落ぶりは凄まじく、「～させていただく」の一人勝ちとも言えそうな勢力